

途切れた縁つなく



いだ・れいら 1977年、伊勢崎市生まれ。短大卒業後、24歳で実家の井田石材店に入り、墓石デザイナーとして活動する。

井田 怜良さん

「建立を進める女性専用の墓は、自分自身の悩みから出発している。38歳になり、20代とは違っていろいろなことを考えるようになった。生きていく間は自分の力で何とかするつもりだが、独り身で死後の不安は残る。世の中には同じように悩んでいる女性がたくさんいるのではないかと考えた。墓に入ることを想定するのとは異なる女性。女性であれば社会的な地位などに関係なく、女性や天涯孤独の女性、経済的に困っている女性などを指定している。社会的に「弱者」と呼ばれる女性たちの悩みを解消したい。墓石のデザイナーでもあるので、女性らしいデザインにもこだわった。一墓を建てたときの意味はどのくらいなのか。」

生の証しに名前刻む

私は石材店の人間なので、墓の大切さを伝えたいと常に考えている。弔いが多様化し、墓を建てない弔いの在り方が広がっていることは承知しているが、このような風潮は「過性のものではないだろうか。墓は日本に根差した文化だ。私たちが今も、先人の存在を墓を通して知ることができるとしても大切だと、これからは建立する墓を、女性たちがこの世に生きた証しとして、社会の絆を強めていく。主な原因は、経済的な格差にあるのではないかと思う。私の周辺でさまざまな墓が途切れてしまっていることを実感するし、それは同世代や家族など、身近な存在にまで及んでいるように感じる。だからこそ、人々へとつなぐ、絆を強めてくれる墓を続けたいと考えている。

「1」よならのカタチ「第3章の最終話」
夕ヒメは、井田石材店の井田怜良さん、仁叟寺副住職の渡辺龍道さんに、社会の絆が弱まっている問題について聞いた。県内の市

第3章 揺らぐ絆⑩

現代の思考……
さよならのカタチ

№.30



わたなべ・りゅうどう 1976年、旧吉井町生まれ。早稲田大卒業後、総持寺(横浜市)での修行を経て仁叟寺に入る。県曹洞宗青年会会長。

仁叟寺副住職
渡辺 龍道さん

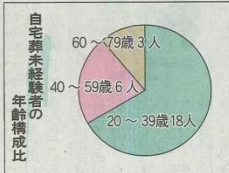
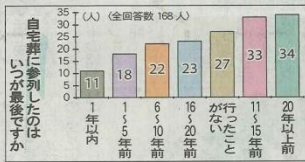
「寺離れの問題が指摘されている。かつて寺院は問を学ぶ学校であり、通行手形などを通じて人の駆け込み寺でもあった。寺は人々の身近に存在していたが、明治以降はその役割を行政が担うようになった。このような状況下で、一般の方との接点が次第に薄れていった。寺にも責任があるように思う。寺と人との絆を築くためには何かが必要か。仁叟寺は前分や花祭りなど、季節ごとに行事を開いて地域との接点を持つようになっている。目指したいのは、寺を訪れる方がほっと一息つけるような空間だ。私は当寺と地域との絆は確かなものだと考えているが、これからも一開かれた寺を維持したい。災害時

地域に開かれた寺に

「寺離れ」が多様化している。弔いを経済の視点のみで考えてしまうと、「何でも安ければいい」という結論につながるが、お金のことを考えて弔うのは正しいとは思えないが、寺には多様な弔いに対応する姿勢も大切だ。寺として、さまざまな弔いの形を提供することも必要だと感じる。社会の絆が揺らいでいる。私には多くの方が、自分から大切な絆をなくしてしまっているように思える。世の中と交わるきっかけを、親や家族のように意識することによって感じたい。弔いの問題は本来、心の持ちようで解決できると思う。寺は絆を失った人を助ける存在でもありたいと考えている。

「自宅葬」参列経験少なく

アンケート
「さよならのカタチ」の掲載に合わせてホームページ上で実施しているアンケートの回答者数は、28日現在で168人。この中から「自宅葬」に関する設問の回答を分析した。
◇設問「自宅葬に参列したのはいつが最後ですか」
回答は全体にはらつきがあったが、最も多かったのは「20年以上前」で34人(20.2%)、「11~15年前」が33人(19.6%)と続いた。「自宅葬に行ったことがない」と回答した人も20人(11.9%)いた。少なくとも最近10年間は自宅葬に参列していない人は17人になり、全体の約割だった。
回答を年齢別にみると、1年以内に自宅葬を経験した11人のうち、それ以外に入浴(40~59歳)と「60~79歳」だった。自宅葬に行ったことがないと答えた27人の7割近くは「20~39歳」の若層。この年齢層では、全体の36%が自宅葬に参列した経験がなかった。



絆が揺らぐ社会について考えた第3章では、この問題が墓や葬とつながる変化に、大きな影を落としている実態が明らかになった。一方で、弔いの周辺には社会の絆を強めようとする力が存在し、それぞれの立場から新たな挑戦を続けている姿も見えてきた。
第4章では、人が弔いにとよむ価値を見いだしているのに目を向け、戒名の問題や弔いをめぐるビジネスの実態を取材していく。(第3章は関口隆太郎 毒島正幸 山田祐二、高野聡が担当しました)

仁叟寺副住職 渡辺龍道さん

地域に開かれた寺に

—「寺離れ」の問題が指摘されている。

かつて寺院は学問を学ぶ学校であり、通行手形などを発行する役所であり、困っている人の駆け込み寺でもあった。寺は人々の身近に存在していたが、明治以降はその役割を行政が担うようになった。このような状況下で、一般の方との接点が次第に薄れていった。ただ、そうなったことには、寺にも責任があるように思う。

—寺と人との絆を築くためには何が必要か。

仁叟寺は節分や花祭りなど、季節ごとに行事を開いて地域との接点を持つようにしている。目指したいのは、寺を訪れる方がほっと一息付けるような空間だ。私は当寺と地域との絆は確かなものだと考えているが、これからも「開かれた寺」を維持したい。災害時の避難所の指定に向けた一連の取り組みはそんな寺に向けた新たな一歩だったと感じている。

—「弔い」が多様化している。

弔いを経済の視点でのみで考えてしまうと、「何でも安ければいい」という結論につながりかねない。お金のことを考えて弔うのは正しいとは思わないが、寺には多様化する弔いに応じる姿勢も大切だ。寺として、さまざまな弔いの形を提供することも必要だと感じる。

—社会の絆が揺らいでいる。

私には多くの方が、自分から大切な縁をなくしているように思えてならない。世の中と交わることでなく、親やきょうだいと会うことさえ面倒に感じていないだろうか。絆の問題は本来、心の持ちようで解消できると思う。寺は絆を失った人を助ける存在でもありたいと考えている。